

経済情勢

概

観

1. 世界経済の見透困難

わが国現在の数量景気は主として世界経済の好況に依存するとみられるが、超完全雇傭に近い欧米諸国の好況は漸く微妙な段階に到達しつつあるように思われる。例えば米国連邦準備制度理事会議長マーチンは経済報告に関する両院合同委員会の公聴会で、

「いずれの方向にせよ、われわれの政策は風に立向うべき性質のものであるが、風の方向を知るのが困難な場合もある」

として現状につき早急な判断を下すことを避け、当分は需給の動き、貸出の増減等の諸要因を注視(watch)すべき時期とみている。一方英国では2月16日の公定歩合引上げ(4.5%から5.5%へ)ならびに一連の引締措置によつて軽度のデフレを予測する向もあり、またこれに先立ちオランダでは2月6日に公定歩合を2.5%から3%に引上げている。さらに3月7日には西ドイツが同じく公定歩合の引上げ(3.5%から4.5%へ)を行つた。

この間、2月14日に開催されたソ連第20回共産党大会では東西両陣営の平和的共存の線が強く打ち出され、ソ連の経済面における攻勢がいよいよ明かとなり、2月29日にはアイゼンハウアーの次期大統領戦出馬決定の発表が行われた。これらの材料の影響はにわかに予断し難く、世界経済の動向はなお当分静観の要があろう。ただ、前号に指摘したように景気の行過ぎに対しては各国共絶えず慎重な考慮を払つてきているから、現在のブームに近い好況が漸次沈静に向うことはあつても、近い将来において急激なデフレーションに見舞われることはまずないものと考えられる。

2. 通貨供給の季節性恢復傾向

翻つて国内をみるに数量景気を反映して通貨供給量が総体として着実に増加を示していることは1月号において指摘した通りであるが、年末年初を通じてこの部面に現れた大きな特色は通貨供給の季節性が顕著に恢復しつつあることである。(例えば預金通貨の1月中の減少額は835億円と

前年の倍額に近い。)この傾向は預金、現金の受払統計にもみられ、また季節性の恢復は銀行貸出の月中の増減にも現れてきている。これと同時に通貨の回転速度も昨年に比しかなり鈍化しており、通貨金融面の動きは平静に推移している。

3. 数量景気の幅漸次拡大

2月の卸売物価は前月に引続き0.7%上昇したが、中旬以降は落着を取戻しており、またこの水準自体も前年同月比0.4%の微騰、前々年同月比4.4%の下落となつている。したがつてこれを以て直ちに従来の安定的な基調が崩れたとみるのは早計であらう。

このように基調そのものの変化はみられないが、最近の経済情勢の推移の中にはこれまでと異つたやや注目すべき現象が出てきている。第一に、騰落は区々ながら物価上昇を示す商品は漸次広範に及び、また市況が輸入動向に敏感となり相場維持のためには弾力的な輸入政策を必要とする商品も一部に出てきている。次に、生産設備の操業率の上昇傾向、企業収益率の上昇と貸出金利の低下傾向、金融情勢の緩慢化等企業の設備投資意欲を促進させるような素地が次第に培われつつあることが挙げられよう。尤もそれは現在のところ、設備投資増大の可能性が昂まりつつあるということで、一般的には現実の投資が過度に活潑化していることを必ずしも意味するものでない。それは結局企業のデフレマインドが大勢として失われておらず、投資計画の実行には比較的慎重を期しているためとみられる。なお以上のほか今後の物価動向に大きな影響を与える要因として総評の春季闘争を中心とする賃上げ問題が挙げられよう。

ところで上記の如き若干の強材料が単に従来むしろ出遅れの部面が頭を揃えつつある段階か、それともそのうちにやや行過ぎがあるかということとは必ずしも断定できない。しかし輸出によつて始発され主としてそれによつて支えられてきた数量景気が内需にも滲透し、一層幅の広いものになりつつあることは否定できないであらう。